「主を知り、あなた 自身を知ること」 (1):キリストの心 を「盗む」

| きないでは、 | きないでは、 | さいでは、 | エルサレムの城壁の外、正午少し過 ぎに、三人の男がカルワリオ(ゴル ゴタ)の丘で十字架にかけられまし た。これが歴史上初めての聖金曜日 でした。そのうちの二人は強盗でし たが、三人目は罪なきお方で、神の 子でした。泥棒のうちの一人は、深 い苦悩と肉体的な痛みにもかかわら ず、イエスとすこし話をしたいと思 いました。「あなたが御国においで になるときには、私を思い出してく ださい | (ルカ23:42) というこの泥 棒の真摯で慎み深い言葉は、人と なった神の心に触れました。神は彼 に数時間後には天国にいると約束し たのです。聖ホセマリアはこの「善 良な泥棒」の態度にしばしば心を動 かされました。というのもこの泥棒 は「ただひとことで、キリストの心 を盗み、天国の扉を自分のために開

いた」[1]からです。「祈り」を私たちは「キリストの心を盗むこと」と 定義することができるかもしれません。そして「祈り」はいますぐ私たちがキリストのすぐ近くで生きることを可能にしてくれます。

十字架上の二つの対話

私たちも同様に、私たちの祈りが、 ディスマスという名前で伝えられて いるあの善良な泥棒の祈りのよう に、豊かな実を結ぶことを望んでい ます。そして、神との対話が私たち の人生を変えてくれることを切望し ています。人間の心を盗むというこ とは、ふつう、相手を説き伏せるこ と、相手の愛情を獲得すること、相 手を熱中させることを意味します。 私たちが人間の心を「盗む」必要が あるのは、そのような大きな愛情を 受けるに値しないときです。人間の 心を「襲撃する」必要があるのは、 私たちがそれを激しく追い求めなが らも、それを手にする正当な権利が ときです。一方、祈りはある意味、 単純な――決して容易なことです。 りませんが――ことがらでいる は、神の恩恵を私たちの心をあれる方法を学ぶこともになる方法を 望え入に私たち自身とともになって ないただけるようにすることなって す。 それただけるようにすることはあれたちに押しつけることは を私たちに押しつけることは せん。

カルワリオの丘でディスマとり苦いに仲間の強盗がもうスのとり苦いた。彼とイエスの対話はとは大いて、大いなに異ないにとないでではないでではないでではないでではないが、でいまが、で受け取ったのはが、でいるというでした。それは彼の最後ではないが、それは彼の最後ではないがある。

の、そして最高の「強奪」でした。 彼は、自分のことを覚えていてほし い、とだけキリストに願いました。 それとは対照的に、彼の仲間は神に 対して謙虚に心を開くことを拒みま した。神はこの男を過去から自由に し、かけがえのない宝物をお与えに なろうとしていたのでしたが。この 男は救われる「権利」を要求し、イ エスの見かけ上の無抵抗を非難しま した。おそらく、これはこの男がい ままで強盗を働くときにいつもして いたやり方だったのでしょう。しか し、ディスマスは自分には何の権利 もないことをよく知っていました。 それだからこそ、ディスマスはキリ ストの愛という宝箱を開くことがで きたのです。彼は神を、本当の意味 での神、すなわち、自分自身のすべ てを一人ひとりの子どものために注 ぎ与える父親としての神として理解 することができたのです。

福音書のこの二つの対話を考え合わ せてみると、主は私たちの自由意志 を尊重したうえで、私たちを幸福に してくれようとしていることが分か ります。また、私たちが愛されるこ とは、かならずしも容易ではないこ とも分かってきます。祈りは、イエ スのお気持ちや考えに思いをはせ、 イエスが私たちに何を望んでおられ るのかを知るための素晴らしい手段 です。私たちが神から授かっている 神聖な生は贈り物です。それゆえ私 たちは祈りを、ある種の水路とみな すことができます。それを使えば、 私たちは神が与えてくださろうとし ている激しい愛の流れを自分たちの ところに引き込むことができるので す。あるいは、予期せぬ招待状とみ なすこともできます。神のいのちを 新しい方法で分かち合いましょうと 神は言ってくださっているのです。

天国の門を開くために

聖ホセマリアは、「神は危険を承知 の上で私たちの自由意志に賭けよう としている | [2]と私たちに教えてく れました。このことで主に感謝する 良い方法は、主の自由意志に対して 私たち自身を開くことです。とはい えそうしたとしても実際は何ら危険 を冒すことにはなりません。危険を 冒しているように見えるだけです。 というのも主は約束の保証を、私た ちへの燃えるような愛という鑿で石 に刻み込んでいるからです。そして 私たちは、神の御心に逆らうことが いかにばかげているかに気づくので す。とはいえ実際、私たちはこの間 違いに陥ることが多いのです。聖パ ウロはこう語っています。「いま私 たちは鏡にぼんやり映ったものを見 ているだけにすぎない。だがそのと きには顔と顔とを合わせて見ること になるだろう。いま私たちは不完全 にしか分からない。だがそのときに は、すべてを完全に知ることになる だろう。ちょうどいま私が完全に

(キリストによって)知られているように」(第一コリント13:12)。自分自身を知るための最良の方法は、キリストの視点で自分を見つめること、キリストの目を通して自分の人生を見つめることなのです。

ディスマスはそのようなしかたで自 分の人生を理解するに至りました。 したがって、イエスの善意と彼自身 の過ちとの間にある途方もない ギャップを直視することを恐れませ んでした。彼はキリストの驕りとは 無縁の、傷ついた顔の中に世界の王 を認めました。イエスの目に宿る愛 情はディスマスの人間的な尊厳を回 復させました。そして、驚くべきし かたで、ディスマスは自分が無限に 愛されていることに気づきました。 善良な泥棒のいわゆる「ハッピーエ ンド は私たちからみれば安直にす ぎると思われるかもしれません。し かし、その最後の瞬間に彼の心が経 験した改心のドラマにも、それをた

しかに可能とした心の準備にも、私 たちは決して分け入ることができな いのです。

このような計り知れない愛情に心を 開くことは、祈りが、恩恵であり、 値踏みや計算などとは無縁の神の愛 を受け入れるための、特別な水路で あることに気づくこととほとんど同 じ意味です。私たちは祈りによっ て、新たな充実した人生、いままで よりもはるかに幸せで有意義な人生 という贈り物を受け取るのです。教 皇フランシスコはこう書いてくれて います。「祈るということは神に動 いていただくことにほかなりませ ん。私たちは、神に演じていただく ための、登場していただくための、 そして、勝利していただくための舞 台を用意するのです」[3]。神は私た ちを変容させるお方であり、神ご自 身が私たちに付き添ってくださいま す。神がすべてのことをなさるので す。神が必要とされるのは、私たち

が神に演じていただくように準備することだけです。そしてここで、キリストが十字架上で獲得してくださった私たちの自由意志が出番を迎えます。

祈ることによって「主が私たちに何 かを求めるとき、それは実際には私 たちに贈り物を差し出してくださっ ているのだ | ということを私たちは 理解することができます。私たちは 神に恩恵を与える存在ではありませ ん。神とは、私たちの人生を輝か せ、意味あるもので満たしてくれる 存在です[4]。祈りこそが神の心を 「盗む」方法なのです。私たちの生 の扉を開くことによって、神に演じ ていただき、神に愛情を持っていた だき、神に私たちを変えていただく のです。私たちには神と一致したい という願いがあります。しかし、ど うすればそうできるかを私たちはよ く分かっていません。「主がどれほ どすばらしい方であるかを味わって

みなさい」(詩篇34:9)。これが祈りの心を手に入れるための道でいる書いている書いている事かででいるものででい気ではいるものででい気ではいるもずに目覚めることではいません」[5]。「あなたはにといるが神に伝えたのはいつすばらしょうか。神のすばられているでしょうか。されているでしょうか。

それゆえに、驚きというものが私たちの祈りの生活にとって本質的ないないまり、私たちのおいてをいまり、私たるのがもないである。気がある結果に覧ってなるはであるはずでではずで、ないではないでしょう。もしなのでしょう。もしあなたがという。もしあながでしょう。もしあなたがという。

私の頭の中に収まるなどということ があれば、あなたはとても小さなも のということになってしまいます。 しかし、あなたは私の心の中に収 まってくださいます。それはけっし て小さな奇跡ではありません」[6]。 神をほめたたえることによって、私 たちはキリストとの関係の真実に気 づきます。私たちの個人的な関心事 の比重が小さくなり、いままで見た ことのないような地平が広がってく るのです。これが私たち自身を神の 自由意志の手に委ねるという「危険 を冒した」結果なのです。

数え切れない祈りかた

聖ホセマリアがメキシコに行ったとき、ある集会でひとつエピソードを紹介したいと言いだしました。それは、ある哲学者の息子が思いがけず家業を継ぐことになったときの話です。——彼が商売について話しはじめたとき、私はその顔をみて笑いな

がらこう言いました。「あなたがビ ジネスですって? あなたが稼ぐお金 はきっと私の手のひらに収まって、 まだ私の手に余裕が残るでしょ う」。何年かののち、また会う機会 がありました。そのとき私はこう言 いました。「ここに私の手がありま す。あなたが稼いだお金はみんなこ こに収まると私は言ったはずですよ ね?」彼は立ち上がり、みなが見て いるまえで、私の手のひらに接吻を しました。そして彼はこう言ったの です。「これが私の稼いだすべてで す」。私は彼を抱きしめてこう言い ました。「あなたは十分以上に支 払ってくれました。行きなさい、わ が盗人よ、神の祝福があなたにあり ますように」[7]----。

祈りの中で、私たちは神の手に接吻をして、私たちが持っている唯一の 宝物である愛情を神に捧げることが できます。このようなしぐさを神に 向けるだけで、愛情と決意の祈りに 火を付けるのに十分だという人もい ます。こうした人々にとっては、体 験することは千の言葉を聞くよりも はるかに意味のあることのようで す。彼らは、神に関係するあらゆる ことを実際に経験したいと考えま す。主と出会うために、ガリラヤの 海から岸辺に吹いてくるそよ風を感 じたいと思います。五感を使ってイ エスとの近さを実感できれば、彼ら の心は平安と喜びで満たされます。 それは他の人と分かち合うべき喜び です。彼らはキリストとともに両手 を広げて全世界を抱きしめ、キリス トが全世界を救うのを助けます。

しかし、祈りの方法は人の数だけ数 え切れないほどあります。たとえ ば、ある人は、ひたすら慰めの言葉 を聞きたいと思っています。イエス はいつでも、必要としている人のた めに励ましと称賛の言葉を与える準 備ができています。「見なさい、ま ことのイスラエル人だ。この人には 偽りがない | (ヨハネ1:47)。私たち が心を開くならば、主はそうした言 葉を私たちに語ってくださいます。 イエスのような愛の言葉を語る人は だれもいません。そこには愛情と真 実が込められています。こうした言 葉を聞くと、私たちの顔にはいただ いた愛が映し出されます。こうし て、私たちは神の目を通して見るこ とを学ぶのです。そして、私たちの 友人一人ひとりが神の恩寵を授かっ たとき、どんなことができるように なるのか、一目で分かるようになる のです。

ベタニアに住んでいた主の友人マルタのように、人に仕えることが最大の喜びである人がいます。イエスはマルタの家を訪問したとき、彼女に「お座りなさい」とはおっしゃいませんでした。むしろ、日々の生活の中で必要な一つのことだけを見つけなさいと、おすすめになりました(ルカ10:42参照)。おそらくマルタ

のような人々は、神は多くの魂を天 国に連れて行くために自分たちを通 じて働いておられるのだ、と祈りの なかで考えて慰めを得ているので しょう。彼らはしばしばその祈りを 特定の人の顔や名前で満たします。 自分たちの活動がすべて主の救いの 協力者としての働きであることを自 覚しているからです。実際、マリア が「より良い役割」を選ぶことがで きたのは、マルタの奉仕の努力が あったからです。マルタの唯一の関 心事は、自分の周りの人たちが幸せ であることを知ることだったので す。

反対に、どんな小さなことがらでも、どんな恩寵であっても、それに心を動かされる人々もいます。それでいたがら自体にほとんど価値がないったとしても、そんなことは関係してもよっています。それででありません。彼らのいます。そであれて関係しているものであれ

ばあらゆることをたちまち理解する ことができます。こうした人々は、 神が惜しげもなく与えてくれる恩寵 を大切にすることの意味に気づいて いるのでしょう。「祈りの養分は私 たちの暮らしに注ぎ込まれている神 の恵みである。だからこそ祈りを けっして忘れてはなりません 1 [8]。 このような人たちはまた、千の小さ なことがらで神を「驚かせる」こと に駆り立てられるかもしれません。 彼らにとって「驚きの要素」はとて も重要です。そして、何が主を喜ば せることができるか、それを推し量 ることは難しくありません。不思議 なことですが、どんな小さなしぐさ であっても、主の心を私たちの感謝 で満たし、その目を輝かせることが できます。私たちが主の愛に近づこ うとする一つひとつの気持ちが―― 最期の瞬間のディスマスのように ――主の心をそのたびに盗むので す。

すべての祈りのかたちを余すところ なく列挙するつもりはありません が、愛するお方とともに時間を過ご す必要があると考える人々もいま す。そういう人々は、たとえば、イ エスをお慰めすることに自分自身が 強く惹きつけられていると感じるか もしれません。彼らにとって愛する お方との時間はきわめて短く感じら れます。イエスの心のなかにある神 聖な愛情を理解するためには、ニコ デモのことを考えてみるのが役にた つはずです。ニコデモはある夜イエ スを訪れ、信頼に満ちた家でイエス と親しく語らいました。ニコデモは ただそれだけの時間をイエスと過ご しただけですが、その後、いかに困 難な状況に陥ろうとも主のために立 ち上がり、他の者たちが恐れから逃 げ出してしまうときにもキリストの そばにいつづける力を自分に見いだ すことになったのです。

時として、自分自身を知ることは、 自分の過ちを見定めることだと考え てしまうことがありますが、を それは真実ではありますが、心真実 一部にすぎません。自分の心ある深 知り、心のいちばん内側にある願望 を知ることこそ、神の声に耳を傾 ない、神の愛で満たされるよのです。 ために必要不可欠なことなのです。

イエスと善良な泥棒との会話は短い ものでしたが、中身のまっしたが、中身は、中身のまっまりにですった。では、心にですった。では、ないないできたいないできたいできたいできたいできたはできたは、からないできたがあるのかを、明らかに指してあるのかを、明らかに指してはないないないないであるのかを、明らかに指していると思いている。

示してくれます。神の唯一の望み は、私たちが幸せになること、とて も幸せになること、世界で最も幸せ な人々になることなのです。善良な 泥棒はこの裂け目から分け入り、最 高の宝物を手に入れました。聖母マ リアは、ディスマスが御子をかばう 姿を目にしました。おそらく聖母は イエスに視線を送り、あの男を救っ てほしい、と願ったことでしょう。 そして母の願いであればいかなるこ とであれ拒むことのできぬキリスト は、ディスマスにこうおっしゃった のです。「今日、あなたは私と一緒 に楽園にいるだろう| (ルカ23: 43) 。

[1] 聖ホセマリア『十字架の道行 き』第12留、黙想のしおり4番.

[2] 聖ホセマリア『知識の香』113 番.

- [3] フランシスコ『キリストは生き ている』155番.
- [4] フェルナンド・オカリス "Light To See, Strength To Want To," article published in Aleteia, September 20, 2018.
- [5] 安平の聖テレジア『自伝』10,3.
- [6] 聖ホセマリア "Notes from his preaching", 9 June 1974; in Catechesis 1974/1, p. 386.
- [7] 聖ホセマリア "Notes from a family get-together", 27 November 1972; in Dos meses de catequesis 1972, vol. II, p. 616.
- [8] フランシスコ『喜びに喜べ』153番.

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kirisutono-kokorowo-nusumu/(2025/12/10)